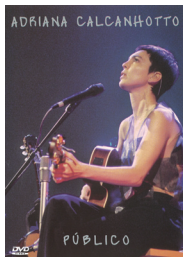


## アドリアーナ・カルカニョット 全ディスコグラフィ

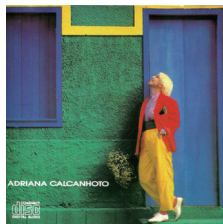


© Catarina Henrique



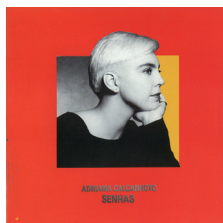
### ADRIANA CALCANHOTTO "PÚBLICO" (DVD) ◆ BMG 74321874949 (2000年)

● CD が本編 13 曲 + ボーナス 2 曲なのに対して、DVD は本編 17 曲 + PV 1 曲 +メイキング・シーンという内容。ステージ前の楽屋でのメイクの場面をモノクロで見せておいて、アドリアーナがステージに上がると画面がカラーに変わるオープニングに、まず、グイッと引き込まれる。アコースティック・ギターを弾き語りによるステージを、一切飽きさせることなく、もっと見たいもっと見たいと思わせるのは至難の業だ。曲にもギターにも歌声にも個性や独自性や説得力が相当に必要だからだが、それを、本作でのアドリアーナは軽々とやってのける。今よりボーイッシュなルックスは、これからの私は本当の私の道を歩いていくんだ、というような雰囲気を感じるかのよう。この時期のステージが公式な映像に残されたことに感謝したくなる。なお、パルチンピンの DVD2 作のサラウンド音声は DTS での収録。本作にはドルビー・デジタルでの 5.1ch サラウンド音声が取られている。 宮子 and 眞



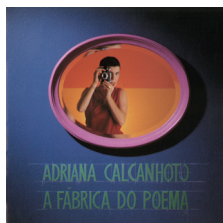
### ADRIANA CALCANHOTTO "ENGUIÇO" ◆ Columbia 2-464136 (1990年)

● 記念すべき 1990 年のデビュー作。プロデューサーはマゾーラで、ハファエル・ハペーロ、セルソ・フォンセカ、パウリーニョ・ブラガといった手練がサポートした。マリーザ・モンチのブレイクを手本とするブラジル音楽界の当時の方向性に漏れず、選曲はマリーザの 1st と相似形。オリジナル 2 曲のほか、同郷のルビシーニオ・ホドリゲスが作曲したサンバ・カンサソンの古典、カルメン・ミランダがらみの曲、アメリカン・ソングをホベルト & エラズモ・カルロスがポルトガル語に訳したヴァージョン、チタンスのヒット曲など。何と言ってもドナート & カエターノの「ナケーラ・エスタソウ」は必聴。サウンドの洗練度を今の彼女の作品と比べるのは野暮だろう。演劇出身のポップ歌手エドゥアルド・ドゥセッキ作「インジュリアード」の、声色を使い分けながらギター弾き語りウルトラ早口で歌うパフォーマンスは圧巻。地元での弾き語りデビューに繋がった彼女を象徴する一曲だ。 船津亮平



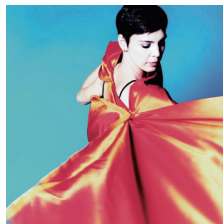
### ADRIANA CALCANHOTTO "SENHAS" ◆ Columbia 850.161/2-464280 (1992年)

● 今聴き返すと、プロダクションが脆弱。キーボードの音色やヴォーカルにかけられたディレイが 80 年代サウンドを引きずっていて、歌謡曲風の MPB というように聞こえる。本人のアーティストリックな指向と大衆性を求めるレコード会社の売り出し方が噛み合っていない、という様子だろうか。それでも、アドリアーナ自身による楽曲は十分に凛とした佇まいを見せているし、今より若々しさを残す歌声もなかなか魅力的。習作の域を出ないアルバムではあるが、原石の輝きを見出すことは可能な内容だ。カエターノ・ヴェローゾの「オ・ノーミ・ダ・シダーチ」のカヴァーや、アルナルド・アントニスのベンによる楽曲を収録したアルバムでもある。ちなみに、ここまでの初期 2 作は本国ではアナログ LP でも出され、本作の LP のジャケットは表裏のアドリアーナの顔の横の部分が切り取られそこからインナー・スリーブの色が見える、という特殊仕様になっている。 宮子 and 眞



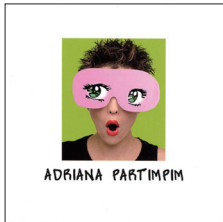
### ADRIANA CALCANHOTTO "A FÁBRICA DO POEMA" ◆ Epic 2-476442 (1994年)

● 3 作目「ボエム工場」は「女カエターノ」と称されるマルチ・アート、アヴァン・ポップ路線が一気に開花。自身のサウンドをイノベートする感覚が、トロピカリアと符合して評価された。ニュー・シネマのブラジル人監督、ジョアキン・ペドロ・チ・アンドラーヂが語った言葉に彼女が曲をつけた「なぜあなたは映画を作るの?」では、オロドン風のカイシャにfolkローレ調のフルートをかぶせるといった実験性が全編を貫く。トロピカリア世代のヴァリエ・サロマウンと共作し、前衛派の建築家リナ・ボ・バルチに捧げたタイトル曲では、ジャキス・モレンバウムのチェロとビリンバウをミックス。「スドエスチ」という曲では歌詞に符合しコップを割る音をフィーチャー。アレンジ面での飛躍は数え切れないが、メロディアスでフォーキーな自作の「メターチ」がテレビドラマの挿入歌で大ヒット。ブックレットも多彩。凝り度合いは前 2 作の比較対象にならない 1 枚。 船津亮平



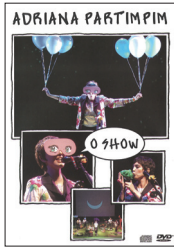
### ADRIANA CALCANHOTTO "MARITMO" ◆ Epic ESCA-7498 (1998年)

● 妙にロックな 1 曲目や、ハウス・サウンドを取り入れた 6 曲目あたりは、ちょっと勇み足。音楽的な引き出しの豊かさは伝わってくるが、楽曲としての吟味に欠け、結果としてちょっととっ散らかったアルバムという印象を残す。しかし、それでも本作は、現在に連なる彼女の最初の一步が刻まれたアルバムなのは間違いない。中でも、自作の名曲「ヴァンポラ」、ドリヴァル・カイミとのデュエット、ペドロ・ルイス & バレーチとの共演によるレゲエ、と続く序盤の 3 曲は桃源郷と評するに十分な仕上がり。加えて、「カエターノを食べよう」、「マイス・フェリス」といった、非常に重要な曲も収められている。美しいメロディーメーカーとしてのアドリアーナの才能が開いた楽曲と言えるのが「マイス・フェリス」ではないだろうか。オリジナル・リリース当時に出版された日本盤 CD には、スバの手による同曲のリミックス・ヴァージョンがボーナス・トラックに収められていた。 宮子 and 眞



**ADRIANA PARTIMPIM**  
**"ADRIANA PARTIMPIM"**  
 ◆BMG 82876592092 (2004年)

●構想10年、「大人も楽しめる子供向けアルバム」を子供時代のニックネーム“アドリアーナ・バルチンピン”名義で発売。後続のDVD『オ・ショー』と並び、大ヒットとなった。アルバム中最大のヒットとなったクラウチーニョ&ブシェーシャの「フィコ・アシン・セン・ヴォセ」や、カエルのおもちゃとキスするドメニコ作「ボルボレッタ(蝶々)」は2007年の来日公演でももちろん披露。バーデンが1961年に録音した「リサウン・チ・バイアン」、中国人は1ヶ月に一回しかご飯を食べない」と歌う「リギ・リギ・リギ・レ」など、一度聴いたら耳から離れないポップ・ミュージックはもちろん子供たちだけのものにあらず。白眉は何と言ってもアルナルド・アントゥニスの「サイバ」のカヴァー。“知ってるかい、サダム・フセインもピノチェーもみんなみんなお母さんがいるんだよ。赤ちゃんだったんだよ……”。ブラジルの子供たちが羨ましい。世界一の歌のお姉さん、それがバルチンピン。 船津亮平



**ADRIANA PARTIMPIM**  
**"O SHOW" (DVD)**  
 ◆Sony/BMG 82876755559 (2005年)

●初めてこのDVDを見た時にブツ飛んで、しばらくはこのDVDばかりを見ていた。ひとことで言うなら、はいだしようこが出ていた時代の『おあかさんといっしょのファミリーコンサート』のような作品。当時のはいだの持ち歌は、ディラン風あり、サンバあり、サルサあり、沖縄音楽あり、と子ども向けでありながら楽曲そのものは実に見識の豊かなものばかりだったのだが、それをさらに高度に音楽的に

仕上げたコンサートがここで繰り広げられる。保育園の遊戯室のようなステージは、各種のおもちゃも立派な楽器。ポウルに張った水もオルゴールも、すべて演奏の一部になる。アーティスト肌のアドリアーナが、目にも耳にも子どもに優しい音楽を奏でる。そのこと自体に驚かされるし、なぜバルチンピンが生まれたのか、ブラジルの子どもたちは本作をどのように理解しているのか、本当にいろいろ知りたくなる。ブラジル音楽DVD史上に燦然と輝く大名作だろう。 宮子 and 真



**ADRIANA PARTIMPIM**  
**"PARTIMPIM DOIS"**  
 ◆Sony/BMG 88697576532 (2009年)

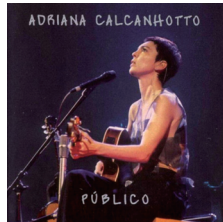
●バルチンピンのアルバムを聴く時ほど「ああ、ポルトガル語が理解できればいいのに」と思うことはない。2曲目がケータイの着メロを扱っていることは想像がつくが、ほかの曲もきつと歌詞は子どもに優しい内容なのだろう。音だけを聴く分には、とて

も子ども向けとは思えない高度にポップな楽曲がここにも並ぶ。ヴィア・ロボスの作でエグベルト・ジスモンチのレパートリーである「カイピラの機関車」では機関車の走る音が後ろに鳴らされ、ジョアン・ジルベルトの「ピン・ボン」にはオロドゥンのブラジリアン・パーカッションをサンプリング。ジョアンの曲に彼の生まれ故郷であるバイアアの風景が鮮やかに重ねられる。ブラジルの子どもたちは、本作を通じて、ジスモンチやカエターノやジョアン・ジルベルトを知るようになるのだろうか？ だとしたら、こんなに素敵なお姉さん。遊び心を超越した使命感に拍手を贈りたいし、この先もリリースが続くことを願っている。 宮子 and 真



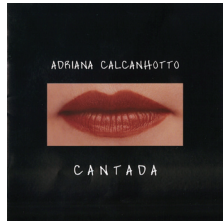
**ADRIANA PARTIMPIM**  
**"DOIS É SHOW!" (DVD)**  
 ◆Sony 88697805049 (2010年)

●もう、ダントツ。ぶっちぎり。見終わった後に押し寄せてくる感慨の深さは、並大抵のものじゃない。いちばん凄いと考えるのは、リオの会場を埋めた小学生以下の子供たちが、こんなに音楽的な偏差値が高いコンサートに熱狂し大喜びしているところだ。バンドの5人はモレーノ・ヴェローゾ、ダヴィ・モライス、ドメニコ・ランセロッチらに一新され、②はリンガラ風、ポップ・ディランの⑩はテックスメックス風と、通の大人が見ても手応え十分の演奏が繰り広げられる。しかし、⑦では実際にステージの上を「小さな汽車」が走るなど、歌詞や衣装や各種の小物は子供が喜ぶ平易な表現を厳選。未来の才能たちに音楽の尊さを伝えるバルチンピンは、ポップ・ミュージック史上においても相当に画期的な存在だ。英語の字幕付きで、リアにも楽器が振られたDTSの5.1chミックスもゴキゲン。紙製のピンクのお面付きなのも楽しい。(※ブラジル盤ディスコガイド2010年12月号より引用) 宮子 and 真



**ADRIANA CALCANHOTTO**  
**"PÚBLICO"**  
 ◆BMG 74321756812 (2000年)

●ソニーからBMGに移籍しての第1作。本作で注目すべきなのは、レコード会社を移ったのと同時にアドリアーナが自分の創作活動のイニシアチブを自分で握ることができるようになった、と感じられる内容になっている点だろう。ギター1本の弾き語りによるライブ・アルバム、という点はソニー時代の“余計なアレンジ”を排して自身の楽曲の本質を伝えたいという意志を表しているように思えるし、オープニングで聞こえる観客の歓声の音の処理も相当に実験的。実際のところ、ソニー時代の作品には今ひとつ思い入れが持てなかった僕も、本作を聴いて一気に彼女の大ファンになった。もうギターは上手いし、歌声は可憐だし、曲はメロディアスなフックに富んでいるし。ニューヨークのスターリング・サウンドでジョージ・マリノの手によってマスタリングされた音も、ソニー時代とは見違えるような生々しさを伝える。彼女にとっての転機になった名作ライブだ。 宮子 and 真



**ADRIANA CALCANHOTTO**  
**"CANTADA"**  
 ◆BMG 74321957172 (2002年)

●ミニマルな編成による“宅録”路線のアヴァン・ポップ。アドリアーナ史上最も内省的な作品とも言われる『カンターダ』だが、実は実はベスト盤のコンピレーションシリーズ『ベルフィス』を除けば、彼女の作品の中で最もヒットした1枚でもある。『マリチモ』以降4年ぶりのスタジオ録音。モレーノ+ドメニコ+カシン(当時はモレーノ+2と名義)が参加した「プログラマ」や、ダニエル・ジョ

ピンのピアノをバックにカヴァーしたマドンナの「ミュージック」は2007年の初来日時でも披露された(モレーノとのダブル・チェロ!)。『マリチモ』でのペドロ・ルイス&パレーチもそうだが、常に新しい感覚を取り入れ自身のサウンドをイノベートせずにはられない彼女。ロス・エルマーノスやボサカノヴァ、そして+2といった若き精鋭たちにとって、いい姉貴分であるのは想像に難くない。一聴地味ながら、知らず知らずのうちに繰り返してしまう麻薬のような1枚。人はそれを名作と呼ぶ。 船津亮平



**ADRIANA CALCANHOTTO**  
**"MARÉ"**  
 ◆BMG JAPAN BVCM-31237 (2008年)

●最初に聴いた時えらく地味なアルバムに思えたのは、『バルチンピン』初作のハジケた姿がまだ残像としてあったからだろう。あるいは、アート・リンゼイが共同プロデューサーに迎えられたことから、マリザ・モンチでいう『アモール、アイ・ラヴ・ユー』のような超ポップな作品を期待してしまったからかも知れない。つまり本作は超ポップな作風ではないのだが、今冷静になって聴き返すと、落ち着いたトーンに包まれた佳作だと思える。演奏の面では、モレーノ・ヴェローゾ、ドメニコ・ランセロッチ、カシンの「+2トリオ」が大活躍。以前からの断片的な共演、及びこの前年に行なわれた3人の来日公演といった過程が、本作で遂に1枚のアルバムに結実したのが判る。また、カエターノの「オンチ・アンダラス」をカヴァーするなど、トロピカリア継承ムードも濃厚。アルナルド・アントゥニスの共作「パラ・ラ」にはアルナルドが歌うヴァージョンも存在する。 宮子 and 真



**ADRIANA CALCANHOTTO**  
**"O MICROBIO DO SAMBA"**  
 ◆Sony Music SICP-3267 (2011年)

●「幼い時にサンバの微生物が住み着いて以来、微生物は僕の中で増殖して、離れないどころか、歳を取るとつれて僕をより重度に感染させる」——これは本作にアドリアーナが寄せた短文の一部だが、ルビシーニオ・ホドリゲスの回想文の引用だ。タイトル『サンバの微生物』はここからとられている。本作のテーマは必ずサンバ。ギミックなし。彼女が得意とした音響的な実験性を本作では封印した。声とギターでアドリアーナ、Perにドメニコ、ベースにアルベルト。クールかつ女性的に、生音に拘りながら、この3人によるサンバマナーで自身渾身のサンバ12曲を聴かせる。8作目で初めて、彼女自身の作詞作曲の曲で全曲が占められた。アドリアーナに流れる生々しい血を見せられるような濃密なサンバ・カンサンの世界が響く。彼女の痛みが昇華されたサンバ。痛くて美しい。この血の濃さに鳥肌が立つ。(※ブラジル盤ディスコガイド2011年5月号より引用) 花田勝暁